



TITLE:

最新発見の京都市街圖金屏風に就て

AUTHOR(S):

[藤]田, 元春

CITATION:

[藤]田, 元春. 最新発見の京都市街圖金屏風に就て. 地球 1932, 18(1): 48-52

ISSUE DATE:

1932-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184058>

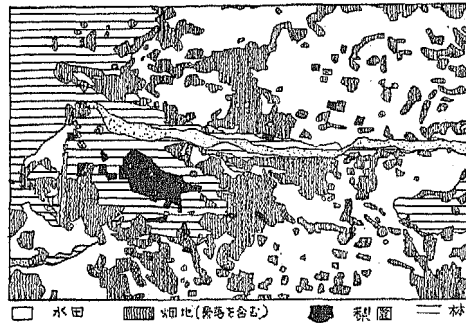
RIGHT:

ひ縮め、從來の桑園と云へども、此の梨耕作と比しては、極めて低價値の仕事なので、梨園に變りつゝある。北扇の上扇に於ても此の現象が見られる。(第九圖參照)

九、結 論

此の稿に於ては、地下水研究を記述し、併せて地下水と文化景觀との關係について論ずることを期した。文化景觀との關係に於て、地下水深度を取つて見たのであるが、溫度との關係として土地肥沃度の問題を考察すると興味あることであるにちがひない。更に嚴密に、考へるならば、水を土地濕度や、飲料水、雜用水、灌漑

第九圖



土地分類圖

用水と區別し、然も定量的に文化景觀との關係を論ずべきであるが未だ公開のはこびにいたらない。
(完)

最新發見の京都市街圖金屏風に就て

藤 田 元 春

昭和七年五月二十一、二、三、三日間京都市東洞院丸太町下ル守屋孝藏氏宅に於て蒐藏品の

展觀が催された、第一席印度ガンダラ石佛、大同、龍門、天龍山石佛、六朝觀音石佛、北魏佛

塔、北魏唐代の金銅佛、漢書像石をはじめ珍品名作にとみ、第二席には石器時代の土器から、周、秦、漢、六朝、唐、宋各時代陶磁器の逸品があり、第三席には漢鏡の數百、中にも前漢から六朝末に至る紀年鏡（それは世界に現存するものゝ凡そ二分一に達するとの事）唐から元までの紀年鏡以下秦より唐、樂浪出土、日本出土の漢鏡、日本仿製漢式鏡第四席には日向、上野、大和出土の馬具一式、第五席は六朝の石佛、唐華紋壺、漢帶鉤、裝身具、金銅佛、第六席は唐の葬飾鏡宇佐出土漢鏡、上野出土の金銅大刀、樂浪出土品、慶州出土品の珍でいづれをみても上代の支那文化の資料たらざるはない逸品である、さうした數多い出土物の外に廊下に出された金屏風半双六枚折が特に筆者の眼をひいたのである、實は二年以前にも全じく全家の蒐藏品展觀があつて前記の漢鏡や樂浪慶州の出土品六朝佛には御眼にかゝつたが、その際にこの屏風は無かつたからである。最近に京都の某骨董屋

最新發見の京都市街圖金屏風に就て

から手に入れたといふことである。

近頃古地圖が流行してつい先日の一誠堂の古本市には寛文六年江戸の經師屋から出版した江戸圖が定價八十圓、全じく寛文六年の大阪圖が定價四十五圓と張り出された位でいづれも中繪圖紙摺の粗末なものである。それ程の時代物でその價であるとなると、この金屏風の如きは正にこれ天下の逸品であるから價はわからない。

京都の活版の古圖は拙著の平安京變遷史にものせたやうに富岡鐵齋翁の藏本であつた寛永の古圖を以て最古とする。ついで平安城東西南北町並の圖田中勘兵衛氏の藏本がある。この後の方は前者よりも少しく後出でその周圍に名所の神社佛閣の繪が入り前者の如く條坊のみを畫てゐない長所がある。寛永版である證左は、兩圖共に板倉周防守屋敷が記入され、東門跡があつても、枳殼邸がなく、又寛永十八年に移轉した今の島原遊廓が、後の慶安版のやうに記されてゐない點に存する。周防守は元和六年から寛永

正保、慶安をへて承應三年まで前後二十五年間、京都所司代をしてゐた、名所司代であつた。その間に京都は秀吉のつくつたお土居の東の方に段々と進出して、お土居を残しながら河原町から東、河までの間に多くの町屋が發展した。今の木屋町（樺木町といふ）先斗町、五條新地、などがさかえた。それと全時に堀川の西で、もと聚樂第のあつたところ、中立賣から、下立賣の間堀川から千本までの間も、段々人家が増加した其他の方面にも市外が追々と増加した。

まづさうした寛永版の古圖を見た目で、この守屋氏の金屏風をみると、いかにもこの金屏風が、寛永版と同時のものであらうといふ考に導かれる。田中勘兵衛氏藏の寛永版のやうに、洛中の外に名所の神社佛閣が周圍にある。北を右にし西を上にして横にした金地に大きい洛中圖を入れ外端は山をかき、その山の中にも一々神社佛閣が入つてゐる。圖中に板倉周防守屋敷がある、又東門跡がある、しかし枳殻邸即東門跡

の下屋敷はない。それから島原もないのであるから、これを寛永の古地圖といふに妨げないらしい。猶本圖では上述した中立賣と下立賣との間、堀川と千本との間西の方に、芝生があつて聚樂第の跡から西の方の野原が、猶人家になつてゐない古さをしめす、東本願寺東方もまだまだ淋しい姿にしるしてあるから、愈以て古い寛永當時の地圖といふ所に達する。しかしこの圖に疑問とすべきものは、そのお土居である。お土居は右の兩寛永古版にはない、しかし本圖はいかにも目さむるばかりの緑青と胡粉で、洛中の周圍を整然と一周したお土居をしるし、それと群青でひいた加茂川や桂川によつて圖版全體をひきしめ、誠に地圖としての繪畫的效果を十分に發揮してゐるのである。従つてお土居こそ實に本圖の主眼だといふべきである。所がよく之を見ると、その加茂川べりには二重のお土居があるのである。（即出町から四條橋西根まで）元來お土居は秀吉公の時河原町と寺町との間

に一本だけ設けられたものである。しかし其後高瀬川の開發（慶長十八年）で樵木町や新地が發達した。そこで新土居といふものを河原町の東出町から四條邊まで川に沿うて作くつた、故にこれを新土井といふ。それは末廣町古記にある通り、

寛文中板倉内膳正重矩爲御所司。以東方封疆、爲民家後。自是以東限賀茂川、西岸築石垣爲堤防。故洛中東加茂川相成。（拙著平安京變遷史參照）

とあるのであるが、龍谷大學所藏の寫本京都圖にも古土井、新土井の語が記され、その新土井に板倉内膳正殿御上京の時出來と明記されてゐるのである。内膳正は周防守の後、寛文八年から十年までの在任である。

して見るとこの金屏風に、この新土井が明記されてゐる以上、いかに内容が古くとも周防守殿當時の地圖ではないといふ疑が生ずる。少くとも寛文九年の地圖である。内膳正殿は全じ板

倉だから、板倉周防殿當時の古圖（寛永版）を種本として、新しく出來たお土井を記入したものと云はねばならぬと考へる。

この新お土井も後世寛政六年頃になると、大方は消失した。けれども猶所々に残つてゐた、その事は拙著に挿入した全年のお土居略圖を見るとわかるであらう。

何れにしても本圖は珍らしい寛永の古圖を寛文に寫したもので板倉内膳正殿が在京當時のお土居をしるしたものとして、龍谷大學所藏の寫本古圖と共に、京都市研究の好資料であると思ひ、併せて古地圖は、後日によく寫されて新しい時代に古い形を傳へるものだといふ證據になるものだと思ふ。寛文九年は皇紀二三二九年で島原遊廓が出來て、後二十八年後になる、それでも遊廓は書いてゐないといふ偽古である。

予は守屋孝藏翁にこの圖は恐らく寛永頃のものであらうとのべておいたけれども、本文によつてこれを訂正する、それにしても稀世の珍品

ではある。我國では地圖を金屏風に仕立てるものとが特に寛永頃に流行し、世界圖、日本圖の外西海陸細見圖などの金屏風も多くは其頃に出来た。本圖はさうした金屏風時代の最後を飾る一であらうと考へる。圖に一つは長谷川としるした印影がある。名の刻印は讀むことが出来ない

が地圖師でなくて畫家にかゝした事は、これによつて愈明である。故に自からかやうに、お土井丈は當時の姿でも古い所は古圖によつたものであると考へる。畫家は往々にして罪なことをするもので華押を圖の真中に寫したりして、折角の古圖を題なしにする例がないではない。

西班牙紀行 (一)

小牧實繁

五月(一九二九年)廿一日、火曜日。六時驛前ホテルの深からぬ眠りは覺めた。七時朝食、七時三十二分ポルドウ驛發、西班牙に向ふ。低平なランドの海岸平野の砂地に植ゑた松の幹に傷をつけて樹脂を採つてゐる景色が珍らしく眺められる。御燈明の土器の様な器を幹に緊り着けて樹脂を受けてゐる。又松林には牛などが飼はれてゐる。

十時十分ダー驛(Dur)着。此れより南は最早やランドの平野の如く低平ではなくなる。
午後一時イルン驛(Irun)着。旅券の検査及び税關の調べがあるが極めて簡單である。
一時半サン・セバスチアン(San Sebastian)着。風光明媚な此の海岸の樂天地で一日を過ごす積りで途中下車、ホテル・テルミニウスに入る。